

うつせみ／空蟬とは、もともと蟬の抜け殻のこと。現世やこの世に生きている人のことを「現身（うつしおみ）」といい、「うつしおみ」が、うつそみ、うつせみと、呼び方が変化した。蟬は、幼虫として土の中で何年も過ごし、脱皮し、成虫になると、地上ではわずか2週間～1カ月しか生きられない。そのような宿命を持つ蟬の抜け殻を、この世の儚さと重ねた比喩表現である。

らしく

自分らしく、
粹なくらし

CLOSE UP

被爆80年 ヒロシマの記憶 訴えつづける 平和の尊さ

CLOSE UP 01



日本原水爆被害者団体協議会
草の根運動による核廃絶への努力、
核兵器を再び使用させないための証言活動を
継続する意義を世界へ

CLOSE UP 02



特定非営利活動法人音楽は平和を運ぶ
音楽には国境・言語・宗教・民族の壁を超える力がある
音楽の持つポジティブな力を、広島から世界に発信

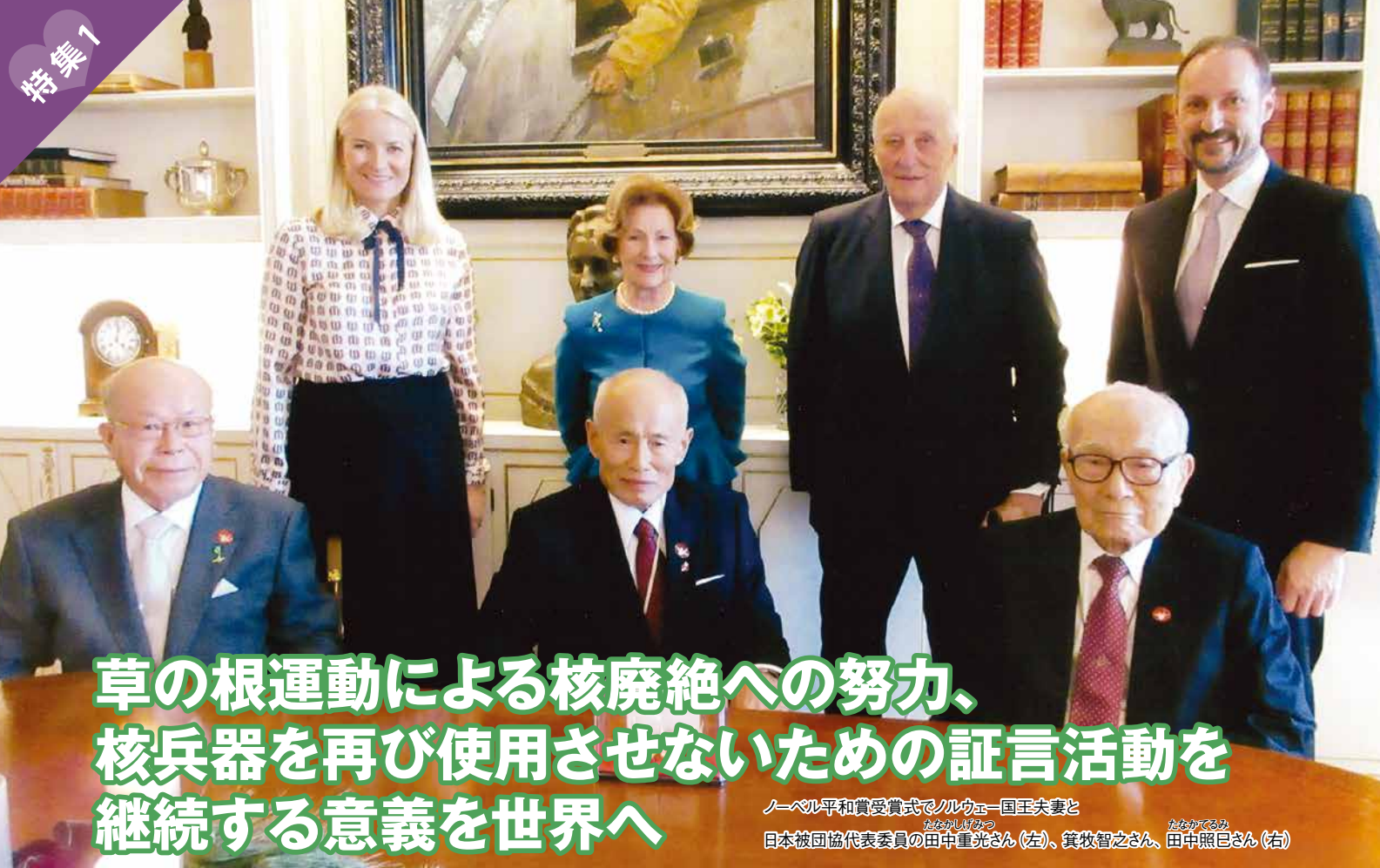
CLOSE UP 03



朗読劇「蛍火」制作委員会
朗読劇を通して伝えていきたい
いまの私たちが平和のためにできること

連載

- ▶らしくくレポート 原爆犠牲者となった先輩方の思いを引き継ぐ
- ▶らしくくコラム 被爆の記憶という生命線 ▶ようこそ！公民館へ～安芸区内公民館～
- ▶人材バンク 名人 宝人 達人 ▶Hmi助成団体決定！ ▶Hmi助成支援団体のご紹介 ▶情報の森 ▶プラザ通信



草の根運動による核廃絶への努力、核兵器を再び使用させないための証言活動を継続する意義を世界へ

ノーベル平和賞受賞式でルウェー国王夫妻と
日本被団協代表委員の田中重光さん(左)、箕牧智之さん、田中照巳さん(右)

被爆80年 ヒロシマの記憶 訴えつづける平和の尊さ

令和7年8月6日、広島は被爆80年の節目を迎えます。終わらない戦争、進まない核軍縮という現状の今こそ、被爆地広島から平和を訴える活動している団体を紹介します。

日本原水爆被害者団体協議会



<https://www.ne.jp/asahi/hidankyo/nihon/>

核兵器廃絶、被爆者救済を訴え続け、大きな節目となるノーベル平和賞受賞の知らせ

令和6(2024)年10月、核兵器のない世界を実現するための努力と、核兵器が二度と使用されてはならないことを証言によって示してきたことを理由に、ノーベル平和賞を授与された「日本原水爆被害者団体協議会」(略称:日本被団協)。現在、三人いる代表



▲ 箕牧智之さん

委員のひとりが広島県原爆被害者団体協議会(略称:広島県被団協)の箕牧智之理事長です。

日本被団協は、昭和31(1956)年に結成した、47都道府県それぞれにある被爆者の団体の協議会で、唯一の被爆者全国組織です。核兵器廃絶や原爆被害への国家補償要求など、被爆者の救済を訴える活動を続けています。

「平成27(2015)年に初めてノーベル平和賞の候補に推薦されて以来、これまで10年間ずっと毎年10月の発表の日は広島市役所に関係者が集まって、発表を待っていました。今回も受賞する可能性は正直低いと思っていた中での受賞発表の知らせに、驚きと同時にこれまで核兵器の廃絶や被爆者の救済を訴えながら運動を続け志半ばで亡くなった人たちの顔が脳裏に浮かびました」と箕牧さん。今回の日本被団協の受賞式には異例の千人近い関係者、報道陣が集まり、世界各国の関心の高さをうかがわせました。

箕牧さんが理事長を務める広島県被団協は、被爆者相談や、核兵器廃絶をはじめとする平和運動として、奇数月の毎月22日に元安橋のたもとでの署名活動、被爆体験の継承として依頼のあった学校、団体へ講話、平和記念公園内の碑めぐりガイドなどを行っています。

箕牧さん自身は、3歳の時に広島駅の近くで働いていた父親を捜すため、原爆投下の翌日、母親ともに広島市内に入り、入市被爆しました。戦後は、旧豊平町(現在の北広島町)で暮らし、旋

盤工として働きながら、豊平町町会議員も努めました。そして、平成17(2005)年の町村合併の際、旧豊平町の被爆者の会の会長が引退、後を託され平和活動へ参加。やがて、海外でも被爆証言活動をするようになると、当時の県被団協の理事長だった坪井直さんから事務局長に指名。令和3(2021)年、広島県被団協の理事長に、翌年からは日本被団協の代表委員に就きました。

被爆から80年。大きな課題を抱える中、90年、そして100年を見据える

「被爆者は、長年、差別や事実無根の偏見、根も葉もない噂に悩まされて被爆体験について口を閉ざす人も多かった。合わせていつ自分の体調が悪くなるか、分からない恐怖心。身も心も疲れるそんな中でも、必死に生きてきました。しかしあれだけの被害と犠牲を払った第二次世界大戦以後も、世界から戦争は一向に無くならない。戦争を行うのは国だが、犠牲を負うのは国民。日本の平和もいつ崩れるか分からない。被爆の本当の実相を知っている、一世が声を上げ続けたいといけななんです」。

被爆80年を迎えた令和7(2025)年。全国の被爆者は、10万人を割り、高齢化と減少が進んでいます。箕牧さんは、今後の活動について「被爆者も高齢化が進み、思うように活動が出来なくなっているのが実情であり、どう活動していくのか大きな課題です。10年後の被爆90年、さらに100年の時には被爆二世の会や、高校生平和大使が中心となって核兵器廃絶、そして今から80年前に起きた出来事の実情を、日本だけではなく世界に伝えていくことが大切になってきます」と話します。

ノーベル平和賞受賞以降、国内のみならず、世界各地からも講演の要望が届く現在、箕牧さんは自身の体調が許す限り、今後もその実相を届け続けるつもりと語ってくれました。

広島平和記念資料館東館1階北側ロビーにてパネル展開催中(入場無料)

「日本被団協ノーベル平和賞受賞記念パネル展被爆者一核なき世界を目指して」

令和7(2025)年8月31日(日)まで

※ノーベル平和賞のメダルと賞状のレプリカも展示中



自分らしく、
暮らそう
らしっく

Vol.72
空蟬号
2025.7

contents

特集

01 被爆80年 ヒロシマの記憶 訴えつづける平和の尊さ

▶日本原水爆被害者団体協議会



広島を訪れた
高校生に被爆の
実相を語る
体験講話を実施

▶特定非営利活動法人音楽は平和を運ぶ



人の心に平和の
とりでを築く
コンサートの様子
(令和5年)

▶朗読劇「螢火」制作委員会



「朗読劇螢火Ⅱ
河本一郎伝」
稽古の様子

05 らしっくレポート ひろ記者が行く

▶原爆犠牲者となった先輩方の思いを引き継ぐ

らしっくコラム

▶被爆の記憶という生命線
広島大学平和センター センター長
広島大学学術院大学院人間社会科学科平和共生プログラム 准教授
Luli van der DOES (ファンデルドゥース瑠璃)

06 ようこそ!公民館へ

▶安芸区内公民館

07 人材バンク 名人 宝人 達人

▶村上 恭子さん
▶宇治木 敏子さん

09 Hm助成団体決定!

10 Hm助成支援団体のご紹介

▶段原地区町づくり協議会

11 情報の森

15 プラザ通信

音楽には国境・言語・宗教・民族の壁を超える力がある 音楽の持つポジティブな力を、広島から世界に発信

特定非営利活動法人音楽は平和を運ぶ

<https://music-peace.jp/>



音楽の力で人の心を癒し、 平和へと繋がることに願いを込めて

音楽で平和を発信しようと、平成26年8月、音楽好きの仲間が集まり活動が始まりました。理事長を務めるのは松尾康二さん。

昭和21年、窓ガラスが割れたままの旧制広島高等学校（現広島大学附属中・高等学校）の講堂で開催されたと言われる演奏会。演奏したのはプロ・アマ問わず手元の楽器を持って集まった人々。広島の生存者たちに向けてシューベルトの「未完成」が披露され、聴衆の一人である松尾さんは、その音楽によって気持ちが前向きになり救われたといいます。

その後の広島ではクラシック音楽を聴く機会が増え、クラシック音楽に含まれている理想主義的心情は、復興の精神的支柱となり、新たなまちづくりを実現しました。「被爆のまち」「被爆者のまち」として二度と戦争を繰り返さないよう必死に立ち上がった人々に共感と勇気を与えた音楽は、広島の復興に欠かせないものでした。

同会では、松尾さんの思いに賛同したメンバーが、市民参加型のコンサートや有名オーケストラの招致、広島を拠点に活動する演奏家によるさまざまなコンサートを開催。国境がなく、言語・宗教・民族の壁を乗り越える音楽の力を通して人の心を癒し平和へと繋がることに願いを込めて活動しています。

平成27年に被爆70年事業として始まった「人の心に平和のとりでを築くコンサート」は今年で10回目。一般公募で集まった合唱、オーケストラの部門で各80人を超える参加者が、7月20日広島文化学園HBGホールにてコンサートを開催。10代～80代まで総勢160人以上が4月から練習を重ね、それぞれの思いを音楽に込めて当日を迎えました。



▲ 人の心に平和のとりでを築くコンサートの様子（令和元年）

音楽の共有とともに 日本の文化であるアニメにも着目

世界と感動を共有できるものとして、世界から親しまれ評価されているアニメにも着目した同会では、平成29年8月から「ポップカルチャーひろしま」も毎年開催しています。コロナ禍の令和3年にはオンラインでのライブ配信も実現しました。

「音楽は文化の共有、それと同じくらいアニメは世界的なツールになっている。そのなかでも特に日本のアニメ文化は海外からも高評価。パフォーマンスやコスプレを通じて国際相互理解と文化交流を目指している」と話す、同会専務理事・幹事長の上野谷拓也さん。海外からコスプレイヤー、日本からはゲスト声優も招待し、昨年も一般公募の地元コスプレイヤーも合わせて、総勢200人を超える愛好家がライブや本通りコスプレパレードに参加しました。

「人と人をつなげる力を持つ音楽はまさにポジティブキャンペーンの原動力。広島は被爆都市だが、これからの明るい世界、平和は楽しいというポジティブな思考をもっと広めて行きたい」と、前進こそが上野谷さんたちの原動力となっています。

「ポップカルチャーひろしま」は、令和7年も10月18、19日にNTTクレドホールで開催予定。大好きなアニメのキャラクターに扮し、世界の仲間とつながる絶好のチャンス。参加者募集中です！

<http://www.pophi.jp/>



▲ ポップカルチャーひろしまの様子（令和6年）

朗読劇を通して伝えていきたい いまの私たちが平和のためにできること

朗読劇「螢火」制作委員会

「ピカなんかに負けまあや」苦難を乗り越える力 それこそが必要で重要

平成30年、広島市原爆資料館に展示されている写真「焼け跡に立つ少女」が、当時10歳だった藤井哲伸さんの母・幸子さんと判明したことがきっかけで、広島で長年演劇に携わってきた久保田修司さんを中心に、同会は発足しました。代表は久保田修司さんの妻、久保田美和さんが務めます。久保田修司さんと藤井さんはともに広島市立舟入高等学校演劇部出身ということもあり、広島市立舟入高等学校演劇部のOB有志を中心に活動しています。



▲ 脚本・演出を手掛ける久保田修司さん

久保田修司さんは、「和解」をテーマに脚本・演出に取り組みましたが、コロナ禍もあり、上演できたのは令和5年5月。G7広島サミット直前に、被爆という苦難にあいながらも、戦後をたくましく生き抜いた女性の物語を、世界中の人々に知ってもらおうと朗読劇「螢火」を上演しました。2日間行われた公演には約700人が訪れ、朗読劇の模様を配信しているYouTubeの動画再生回数は7,000回を超えています。

久保田修司さんは、「和解」をテーマに脚本・演出に取り組みましたが、コロナ禍もあり、上演できたのは令和5年5月。G7広島サミット直前に、被爆という苦難にあいながらも、戦後をたくましく生き抜いた女性の物語を、世界中の人々に知ってもらおうと朗読劇「螢火」を上演しました。2日間行われた公演には約700人が訪れ、朗読劇の模様を配信しているYouTubeの動画再生回数は7,000回を超えています。

被爆80年をむかえ 今の私たちにできる事を考える

被爆80年の今夏は、平和記念公園にある原爆の子の像の建立や原爆ドームの保存運動に尽力された河本一郎さん（平成13年72歳で逝去）の人生を描いた「朗読劇螢火Ⅱ河本一郎伝」を令和7年7月31日、8月1日に上演します。「原爆ドームは被爆の象徴のようなもの。今は当たり前のようにそこにあるけれども、河本さんの尽力無くして保存は実現しなかったかもしれません。河本さんが



▲ 「朗読劇螢火Ⅱ河本一郎伝」のチラシ

一生をかけて伝え続けた平和の尊さを朗読劇として上演します」と久保田美和さん。今回も脚本・演出は久保田修司さんが手がけます。

この公演には9歳から81歳まで120人を超える市民が参加。4月から稽古が始まり、朗読・合唱・音楽・挿絵・衣装・ダンスなどそれぞれの分野で力を発揮しています。参加者の中には被爆四世の孫（10歳）と一緒に出演する被爆二世の女性の姿もあり、世代を超えたキャストたちが思いを一つに公演に向けて稽古に励んでいます。

キャストの一人、生後6ヶ月の時に母親の背中で被爆したという板倉勝久さんは前回に続き今回が2回目の出演「脚本・演出の久保田さんの思いに感銘を受けて出演を決めました。被爆の実態と、その後、人々がどのように平和を守るための活動をしてきたのかを伝えていかなければいけない。この朗読劇を通して、自分にも何かできることがあるのでは、と感じて帰って欲しい」と思いを語ります。

皆さんの表情からは、何もできないと諦めるのではなく、「平和を守ること」を自分事として考えると「できる事が見えてくる」という熱意が伝わってきました。

※「朗読劇螢火Ⅱ河本一郎伝」は令和8年8月6日までにYouTubeで配信する予定です。



▲ 音楽チームの打ち合わせの様子



▲ 「朗読劇螢火Ⅱ河本一郎伝」稽古の様子